

オーストラリア南東部の自然系博物館を訪ねて

おおしまみつはる
大島光春（学芸員）

今年（2015年）1月に全国科学系博物館協議会が企画した海外視察研修に参加し、オーストラリア南東部とニュージーランドの博物館を訪れました。全部で7館1園を訪れましたが紙面の都合で、オーストラリアの4館について報告します。



図1 メルボルン博物館。

メルボルン博物館

Melbourne Museum (図1)

オーストラリア第二の都市、メルボルンの中心部にあります。1945年に開館し、収蔵標本数は約1,700万点、年間入館者は併設されたIMAXシアターと合わせて124万人だそうです。運営母体はMuseum Victoria ヴィクトリア州博物館協会（以下、MV）で、同館を含めた4つの博物館（サイエンスワークス、移民博物館、王立展示館）とウェブサイト・モバイルを運営しています。MVの幹部はどこかの博物館に所属するのではなく、複数館のある部門（たとえば展示部門）を担当するそうです。MVは、①標本DB：携帯端末とサーバを使った収蔵システム、②研究：特に海洋関係では日本やインドネシアをはじめ各国との共同研究、③展示：テクノロジーを積極的に導入、④教育：年間25万人の児童・生徒の来館のほかに出張展示も、という4つの活動に重点を置いているということでした。

同館では、哺乳類の収蔵庫と液浸標

本の収蔵庫を案内していただきました。哺乳類収蔵庫は当館とあまり変わりませんでした。液浸収蔵庫の様子は違いました。地震のない地域らしく、なんと標本瓶はガラス製で、数本ずつトレイに入っていますが、棚には転落防止柵がありませんでした。

展示室の特徴は、展示室の床、壁、天井までが変形で、展示標本も多くは垂直、水平、平行にならないように展示されていることです。破綻しないように展示をデザインするのはとても難しかったと思われま

Forest Gallery 森林展示：ところどころに解説のある“森”の屋外展示で、高木が多くありました。奥へ進むと森林火災後の焦げた様子も展示されていました。

Science and Life Gallery 科学と生命展示室：立ち上がったアルマガサウルスなど恐竜、空中にはケツァルコアトルスがありました。ハイテク解説スコープは、覗くと骨格が生体復元され、動きだすもので、映像に合わせて鳴き声、足音や咀嚼音そしゃくが聞こえてきました。

Evolution Gallery 進化展示室（図2）：2階分吹き抜けの、壁が平行でなく、垂直でない展示室に階段状の展示台があり、哺乳類や鳥類が展示されていました。さらに何十ものスポット照明が当てられ、たくさんの動物を白い背景に浮かび上がらせています。その白い壁には生態や風景の映像が映し出されていました。解説板は大きなタッチパネルです。ここは視察中、私が最も感銘を受けた展示室です。

他に、メルボルンの過去と未来を伝えるMelbourne Gallery、心と体の働きや

構造を示すMind and Body Gallery、太平洋の島々で使われてきた小舟や帆などの民俗展示Te Pacifika Gallery、先住民の文化を紹介する民俗展示Bunjilaka (Aboriginal Cultural Center) などがありました。

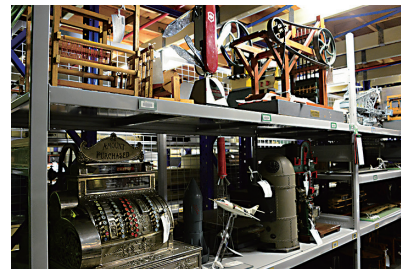


図3 サイエンスワークスの収蔵庫。棚のアドレスや標本ラベルが確認できる。

サイエンスワークス Scienceworks

MVの一員である同館は、メルボルン郊外にあります。元々Pumping Station 下水道ポンプ所があった場所で、1947年まで使われていたポンプや動力源のボイラーも産業遺産として展示されています。本館との間にある中庭の地下には、配管が当時のまま残されているそうです。ここは結婚式やパーティーに貸し出して収入を上げているとのことでした。同館にはプラネタリウムやLightning Room 稲妻体験室などもありますが、3つの展示と収蔵システムを紹介します。

Think Ahead 将来を考える展示室：自動車をデザインするハイテク展示や、未来の宇宙活用など、ヒトや社会の未来についてをテーマにした展示。

Sportworks 運動の科学展示室：体の構造から始まり、さまざまなスポーツを体験するブースがあり、運動時の骨格・筋肉系、視覚、心臓の働きなどを理解するための展示。

Nitty Gritty Super City 核心超都市展示室：いわゆる、子どものための博物館で、都市が持つ機能を資源の再生、建設、荷役などいくつかの場面を体験する展示。

MVの標本DBは、この収蔵庫で紹介されました。棚にはアドレスが振られており、標本にはラベルがついています。ともにバーコードが印刷され、携帯端末



図2 メルボルン博物館の進化展示室。写っていないが手前にも剥製が並べられている。

で読めば標本の履歴や情報が確認できる仕組みです(図3)。標本を移動するときは、移動した先の棚のバーコードを読み込むと、新しいアドレスが登録されます。



図4 クエストコンのエキサイト@Q。右は同室内のフリーフォール。

クエストコン Questacon

首都キャンベラにある同館は、The National Science and Technology Center 国立科学技術センターが、オーストラリア建国200年を記念して設立した施設で、子ども博物館と科学館を合わせたようなところでした。イベント時には建物の白い壁に、テーマにちなんだプロジェクションマッピングを行うそうです。日本が建設費の約半分を拠出したということもあってか、歓待してくれました。今も国立科学博物館や日本科学未来館とは協定を結んでいるそうです。

展示室は円筒内と円筒を取り巻くらせん状のスロープ沿いに配置された、2つのシアター、6つの展示室合わせて8つのゾーンからなっています。これらは1年に2室ずつ展示替えをするそうです。25年前から変えていないのは、Earthquake地震、Lightning 稲妻の2コーナーだけだそうです。各展示室には0-6、8+など対象年齢が表示されていました。約200ある展示装置は他館への貸出やトレーラーでの移動を考慮しコンパクトに作られています。私が注目したのはエキサイト@Q展示室(図4)の“Free Fall 自由落下”、



その名の通り“落ちる”滑り台です。専用のつなぎを着て鉄棒にぶら下がり、「3, 2, 1, Go!」のかけ声で手を離すと、落下

図5 オーストラリア博物館の液浸作業室に備え付けられた非常用シャワーと洗面台。

してすぐに滑り台にすくわれる仕組み。その後水平になった滑り台で減速し、7-8mで止まります。単純ですが楽しかったし、一瞬ですが無重力体験ができました。



図6 オーストラリア博物館の展示台から逃げ出すアンキロサウルス。

オーストラリア博物館 Australian Museum

シドニーにある同館は南半球の大規模博物館の中では最も古く、1827年の創立です。主にオーストラリアと環太平洋地域の標本約1,700万点を収蔵しています。約300名のスタッフを擁し、ほぼ年中無休だそうです。そのうちサイエンス・スタッフは、17名の専門家(研究者、学芸員、標本管理員など)と約100名のアシスタントです。「展示、情報を日々更新して、最新の情報を世界と交換し、市民に知ってもらうことが博物館の役割と考えている。そのために新館を計画中で、若い世代に興味深い事象を見せ、科学への入口としたい。しかし予算的にはMVの方が裕福。」と館長は話していました。メルボルン博物館と同様に名称には出てきませんが、自然史博物館で、人類学、植物学、脊椎動物学、昆虫学などの部門があります。両生類の研究室と液浸収蔵庫、昆虫・クモの液浸収蔵庫、無脊椎動物の乾燥標本収蔵庫を案内いただきました。

研究室に隣接した作業室には非常用のシャワーがありました(図5)。昆虫・クモの液浸収蔵庫では、入口に近い部分に“Primitive Spiders”、“Modern Spiders”というラベルが貼られた棚があったので不自然に思い理由を尋ねると、有料で見学ツアーを行っているので、見学用に並べた棚だとのことでした。次に無脊椎動物の乾燥標本収蔵庫に入ると、入口近くに置かれた箱と、一番奥の移動棚に“TYPES”タイプ標本と表示があり、重要な標本の非常持ち出しに備えていました。

たくさんの展示室の中から、4つの展示室を紹介します。

Skeltons 骨格展示室：この展示室は1850年にできた古い建物の一部だそうです。展示も一部はあえて当時のまま残されています。天井からはミンクヅリが吊され、床にはキリン、アジアゾウのほか、ウマに乗ったヒトが展示されていました。

Dinosaurs 恐竜展示室：ゴンドワナの恐竜が多く展示されていました。アンキロサウルスが展示台を降りようとしている展示は独創的です(図6)。オパール化した首の短い首長竜“Eric”こと *Umoonasaurus* はここにいました!

Surviving Australia オーストラリアで生きる展示室：カエルやトカゲなど生態展示が取り入れられていました。絶滅した有袋類 *Diprotodon* の他、カンガルーやカモノハシの化石などもありました。

Planet of Minerals 惑星の鉱物展示室：鉱物を並べるだけでなく、組成による分類ごとにまとめたり結晶構造の模型があったりと、教育的な展示でした。アマチュア収集家であるChapmanの鉱物コレクションも展示されており、こちらは白で統一された展示室で魅せる展示でした。

まとめ

オーストラリアは、面積が日本の約20倍、人口約2,300万人(≒東京+神奈川)、GDP約1兆5千億ドル(≒関東1都6県)で、広いけれども大国ではありません。しかし、自然史博物館・科学館への力の入れ方は日本と比較になりません。これはイギリスの文化を反映しているのでしょうか。さらに周囲を海に囲まれていることでは日本やイギリスとも同じで、そのせいか海洋や島嶼を中心に国際的な調査・資料収集に積極的だと感じました。展示や収蔵に関して進歩・改善への意欲も強く感じました。

最後に今回の海外視察を主催した全国科学系博物館協議会、旅費を補助していただいた全国科学博物館振興財団およびカメイ社会教育振興財団各位に御礼申し上げます。JSPS 科研費課題番号20605018(研究代表者 大島光春)を使用しました。

註：本記事中の日本語の館名称・施設名称などは、著者による和訳です。